

産学・地域連携でクリエイターを育てる

— 公立高校で全国初のマンガ学科が目指す未来

コアミックス取締役
熊本コアミックス社長

持田修一
もちだ しゅういち



当社コアミックスは、編集者と漫画家による漫画専門の出版社として2000年に創業した^(注)。企業理念として、出版業やキャラクタービジネスから得た収益を、漫画文化の発展や漫画クリエイターの育成に還元することを掲げている。

当社がサポートする熊本県立高森高校は、公立高校で初めて漫画専門学科を設置したことで大きな話題を呼んでいる。熊本県阿蘇郡に位置する同校は、少子化の進行、都市部への人口流出の加速により、近年は生徒数が3桁を割るなど、存続が危ぶまれる状況にあった。そのような中、2021年9月、熊本県教育委員会、高森高校、高森町、そして当社

が四者協定を締結した。それからわずか1年半後という異例のスピードで「マンガ学科」が創設され、県内外から志願者が殺到して、定員40人のところ前期入試で1・82倍という高い競争率となった。この背景には、関係者の強いリーダーシップに加え、当社が2018年から高森町と「エンタメ業界と連携したまちづくり事業」を進め、漫画クリエイターを育成する「アーティストビレッジ阿蘇096区(オクロック)」を建設するなど、海外や日本の漫画クリエイターの育成体制を整えていたことが大きい。本稿では、同校にマンガ学科を創設するに至った経緯、なぜ熊本を拠点に定めて漫画クリエイターの育成事業を進

めているのか、そのきっかけや今後の展望を紹介したい。

海外の漫画クリエイターの育成に向けて漫画賞を創設

漫画出版社にとって、絶えず新しい漫画コンテンツを生み続ける体制づくりは生命線であり、漫画クリエイターの発掘・育成は最重要課題だ。これまで新人漫画家と漫画制作の触媒となる編集者を育てる土壌は、紙の雑誌メディアにあったが、現在は衰退の一途にある。国内ではいずれ、漫画の描き手も読み手も共に激減してしまうことは明らかなことから、その対応策として、私たちは2010年

(注)コアミックス：『週刊少年ジャンプ』5代目編集長を務めた堀江信彦氏と漫画家の北条司氏(『シティーハンター』『キャッツ♥アイ』等)、原哲夫氏(『北斗の拳』『花の慶次〜雲のかなたに〜』等)らが立ち上げた漫画出版社。漫画の編集・制作を核に商品化・コラボ等の展開、研究・分析やアーティスト育成等、多角的に事業を展開している



「アーティストビレッジ阿蘇096区」全景



「アーティストビレッジ阿蘇096区」ライブラリー

熊本への縁の深まり

そのような中、2016年4月に熊本地震が起こった。その復興支援を目指して、私たちは、翌年4月に「熊本国際漫画祭」を開催し、世界に向けて「笑顔」をテーマに作品を募集した。短い募集期間ながら、世界中から復興への想いが込められた200点を超えるサイレントマンガと500点を超えるイラストが熊本に集まった。これをきっかけに熊本の行政や地元企業、県民の皆さまと当社が深まった。

頃から海外の漫画クリエイターの発掘・育成と海外市場の開拓に着手していた。

日本の漫画・アニメは、世界に誇るコンテンツの一つであり、世界中で漫画ファンが増えれば、漫画を描きたいと思うクリエイター志望者も増える。そこで、2013年に世界漫画賞「サイレントマンガオーディション」を創設し、日本漫画の魅力である「感情表現」「演出力」を審査する賞として、テーマに沿ってセリフを用いず絵とコマ割りで表現する短編の募集を始めた。第1回には、48カ国・地域から514作品が集まり、国や言語を超えてわかり合える日本漫画の描き手が

することができた。これをきっかけに、当社は本格的に海外の漫画クリエイターの育成事業に乗り出した。同賞は、この10年間で延べ141カ国・地域から6300人のクリエイターと1万1400の応募作品が集まる世界最大規模の漫画賞となっている。だが当初は、内閣府知的財産戦略本部やクールジャパン機構などにプレゼンしても反応が鈍かった。そこで、自社で賞の運営や育成体制をつくりながら、定期的に外国人受賞者を日本に招待し、授賞式や漫画制作の講義、観光ツアーなどをを行いながら、世界にコミュニティを広げていった。

性もともと熊本県は、『ONE PIECE』の尾田栄一郎先生を筆頭に多くの人気漫画家を輩出しており、1兆1300億円の経済効果を持つゆるキャラ『くまモン』を生んだ土地柄である。日本の漫画やアニメ、キャラクターの力とそれを生み出す大変さを深く理解している県だ。当時、私たちは海外の漫画クリエイターを育成する場所を探していたが、これにすぐさま賛同いただき、「創造的復興」「マンガ県くまもと」を目指す蒲島郁夫知事など熊本の方々の熱意から、拠点を熊本県高森町に定め、2018年から第二本社移転と育成施設建設の準備を進めてきた。高森町の草村大成町長が若者たちの招致と育成に積極的であったこともあり、同年にサイレントマンガ



堀信彦社長授業風景

オーディションの20カ国50人の外国人受賞者を高森町に招いて、有名漫画家が漫画制作の指導をする「くまもと国際マンガCAMPi in阿蘇高森」を協働で開催した。高森町は大自然に囲まれた人口約60000の高齢化が進む自治体だが、海外から漫画クリエイターを招致しようと、役場や町民の方々が総出で私たちと一緒に汗をかいてくれた。このことが、後に当社が高森町にクリエイター育成拠点を置き、エンタメ業界と連携したまちづく

り事業を一緒に進める大きなきっかけとなった。

クリエイターと高校生との切磋琢磨が未来につながる

現在、インドネシア、ブラジル、アメリカ、オーストラリア、フィンランドなどから10人の外国人漫画クリエイターと4人の日本人漫画クリエイターが高森町に移住し、「アーティストビレッジ阿蘇096区」で編集者と共同生活をしながら日本デビューの準備をしている。このうち2人は、すでに連載デビューを果たしており、まさに令和のトキワ荘ともいうべき育成施設となっている。県立高森高校は同施設のほど近くにあり、当社のプロの編集者や漫画家たちが同校マンガ学科の専門授業やマンガ部の部活動に駆け付け、交代で指導に当たれる環境にある。当社社長の堀江も月に1回は教壇に立ち、漫画出版社ならではの実践的かつ親身な指導を行っている。海外の漫画クリエイターと同じく、実力次第で在学中でも即プロデビューをさせることが目標である。また、マンガ学科の高校生とプロデビューを控える外国人漫画クリエイターたちが、親しく交流しながら切磋琢磨して創作活動している様子を見ると、私たちの想像を超えた素晴らしい未来があることを予

感させる。

世界中から才能を集めて育成し世界に羽ばたかせたい

漫画はヒットをすれば億単位の収益があり、それがアニメ化や実写化、ゲーム化されて世界に波及すれば兆単位のビッグビジネスとなっていく。日本発のキャラクターは、世界のキャラクタービジネスの総収益ランキングベスト10の半数を占める。全ては1本の鉛筆と1枚の紙によって、ゼロからイチを生み出すことから始まる。優秀な「ゼロイチ」のクリエイターを輩出するノウハウと土壌があることが、日本の最大の強みなのではないかと思っている。

私たちは熊本県そして高森町を拠点に、全国、そして世界中から才能を集めて育成し、世界に羽ばたかせたいと思っている。世界各国から「手塚治虫」が生まれれば、漫画やアニメが産業として世界でさらに活性化し、日本の漫画コンテンツの価値が今まで以上に上がっていくはずである。それを実現するには、当社だけの力では到底及ばない。漫画・アニメ業界全体の連携はもちろん、国家レベルで産学官が丸となって取り組んでいけるよう、私たちが先陣を切って実績を上げていかなければと思っている。